

英で最先端医療研修

上野市民病院 全スタッフ対象

新年度から

上野総合市民病院（伊賀市四十九町）は、2013年度からイギリスの王立病院や大学病院など3カ所に医師や看護師を派遣し、現地で最先端医療技術を学ぶ「短期臨床研修プログラム」を始める。約20年前、三木哲雄院長が現地の大学病院で勤務した経験から実現した。

受け入れるのはスコットランドのグラスゴー大学「王立グラスゴー病院」、

北イングランドのハロゲイト地域病院、中部イングランドのバーミンガム大学「クイーンエリザベス病院」の3施設。

三木院長はクイーンエリザベス病院での勤務経験があり、ほかの2病院は当時の同僚が現在、働いているという。

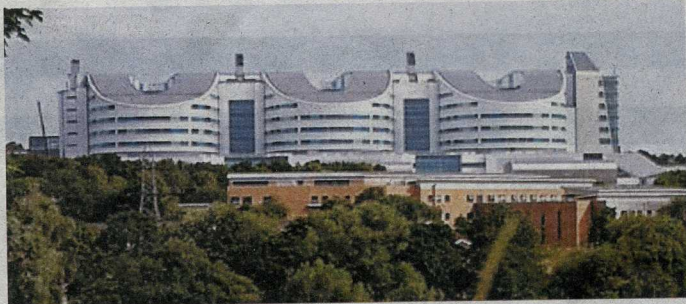
昨年10月28日、三木院長のほか、看護師2人、

事務職員1人の計4人で現地を訪れ、今後の研修受け入れについて約束を取り付けてきた。最先端医療現場も視察し、同行した看護師向けに現地病院の感染管理対策も聴いたという。

今後は年に一度、医師や看護師を派遣する。対象は上野総合市民病院の全スタッフだが、一度に数人規模になる見通し。

三木院長は、市議会への報告で「職員のモチベーションをあげることが目的。医師、看護師すべての職種の研修を受け入れてもらえる」と説明した。

（保田達哉）



小鳥、気に入るかな 伊賀・丸柱小

伊賀市諏訪の丸柱小学校で23日、シジュウカラの巣箱づくりが開かれた。6年生の卒業製作で、7人の児童がそれぞれの箱をつくった写真。

1983年に結成された同小の「笹が岳緑の少年隊」活動の一環。同隊を指導する山中善典さん（57）の指導をうけながら、のこぎりで木を切り、組み立て、絵で彩った。7人が春に卒業した後、新年度に新6年生が箱を設置する。奥野綾己さん（12）は「がんばってつくったので、使ってほしい」と話していた。

子どもへの支援 活動通じ拡大へ

県ユニセフ協会発足

世界の子どもたちを支援する国連児童基金（UNICEF「ユニセフ」）の活動を後押ししようと、全国で25番目となる県ユニセフ協会が昨年12月、津市で発足した。「地域のきめ細かな活動を通じてユニセフを応援したい」と意気込む。

戦直後の1946年、戦災に遭った子どもたちを支援するために設立された。現在は150以上の国と地域で、子どもの教育や保健、紛争・自然災害の緊急支援などを展開している。

県内では、北勢地区を中心に活動していた「三重友の会」を発展的に解消し、日本ユニセフ協会（東京）と協定を結ぶ県協会を設立した。会長に三重大の内田淳正学長を迎え、県知事やNPO、企業の役員などが顧問や理事に就いた。街頭活動や展示を通し、紛争や飢餓に苦しむ発展途

セフの支援活動について伝えていく。「まずは世界の子どもたちの現状を知ってもらうことから。募金はその次のステップ」と事務局長の小池啓子さん（55）。

事務理事の吉田房子さん（64）は「活動に参加したり見たりした人が、身の回りの小さな子どもたちにも思いやりを持てるようになってほしい」と話す。

津市桜橋2丁目の事務所では、グッズ購入での支援もできる。問い合わせは同協会（059・273・5722）へ。ホームページは、www.unicef-mie.jp。（畑宗太郎）

体罰電話相談 県、窓口設置へ

知事が表明

大阪市立桜宮高校のバス

■9市で学年・学級閉鎖

県は23日、インフルエンザの流行に伴い、津市や鳥羽市など9市の幼稚園や小学校、高校で6学年が学年閉鎖、7クラスが学級閉鎖の措置を取ると発表した。欠席者156人中、100人がインフルエンザと診断されたという。

県内には72の定点医療機関がある。14日と21日の週は、1定点あたりのインフルエンザ患者

